■『惜別の歌の語り 恋愛篇』原文（マンドリンクラブ 作成）

元静岡放送ニュースキャスター　若林(現姓 西野)みどりさん 提供

（♪惜別の歌　1フレーズ演奏が終わったあたりで司会者登場 ）

ただいまお送りしております この「惜別の歌」は、わたくし達中央大学に学ぶ学生にとりましては、「蛍の光」に代わる歌とされ、親しい友と別れる時、離れがたい心情に駆られた時、この歌を歌って別れるならわしとされております。

時 昭和 19 年の春、自由なる学園中央大学の庭にも 戦雲は容赦なく吹き寄せ、遂に学徒動員の断がくだったのです。

わたくし達の先輩である中央大学の学生は 長野県は遠く諏訪湖の辺りに配属され、それと時を同じうして 東京のとある女子学生が勤労奉仕に来ておりました。
始めのうちはただ目を見かわしているだけでしたが、二人の間には やがて淡い恋心が湧き、清く美しく そして激しく燃えていったのです。

春が過ぎ、夏が過ぎ、やがて枯葉の吹きすさぶ秋となった頃、上の一見習士官が二人の仲を妬み、中央大学の学生を 千葉県は遠く習志野の地へ転属を命じました。

この悲しい知らせを聞いた二人は 激しい悲しみに打ちひしがれ、とある高殿に上って、島崎藤村 作「若菜集」の一節より口ずさんだのが この歌の始まりとされております。
どうぞみなさま、ご一緒に口ずさんでくださいませ、「惜別の歌」です。